

善意を生かす情報システム

原 島 榮 一
東京消防庁 消防総監

豊かな社会となり、価値観が多様化した今日、人々は個性的な暮らしぶりを志向する一方、長期にわたる安定的な生活を求めている。とりわけ、健康や安全に対する要求は高まっている。

こうした時代の要請に応え、東京消防庁では昨年10月に被害軽減と救急効果向上のため、先端技術を駆使した部隊運用装置の運用を開始した。この装置には、発信地表示、指令予告、有線無線の同時指令、救急医療情報伝達、災害支援情報提供などの諸機能を導入し、部隊運用の精度向上と合理化・省力化を図った。

このうち、発信地表示システムは、119番通報の着信と同時に通報電話の電話番号、所在、加入者氏名等を瞬時に画面表示するものであり、地図情報表示システムと連動して通報地点付近の地図も表示されることになっている。従ってこのシステムは通報内容を補う役割を果たすものであり、災害に直面して気持が動転し、必要な内容を通報できなくなった人、日本語で十分に意思を伝えることの出来ない外国人、身体の不自由な人などに役立つシステムであると言える。

今年の1月から7月末まで約54万件の119番通報のうち、発信地表示システムを運用したのは、40万件余りであった。このうち、間一髪のところで一命をとりとめたり早期に延焼を防止したなど顕著な奏功事例の内訳を調べると火災関係が3割弱、救急関係が7割強であった。また、通報者別に分類すると出火建物の関係者、傷病者本人からのものが65%、通行人等第三者からのものが30%、外国人と身体の不自由な人からの通報が5%であった。これらはいずれも発信地表示システムにより通報場所の特定ができたための確に対処し、被害軽減や傷病者搬送が円滑にできたものである。

このうち、当事者よりは比較的冷静だと思われる第三者からの通報による奏功例が多いことを考えると、発信地表示システムは人の善意を生かす情報システムであるとも言える。外出先で災害に遭遇した場合、たとえそこが行きつけの場所であっても、建物の名称は言えても所在を正確に言うことはなかなか難しいものである。災害を発見し、あるいは救急事象に遭遇し、直ちに119番通報する人にとって発信地表示システムは強力な味方となるのである。情報という語は「情けに報いる」と書くが、その情けに報いるシステムを構築できたことは、国民にとっても消防にとっても喜ばしいものと思われる。

消防をとりまく環境には消防団の活動や自主防災組織の活動などに見られるように、人々の善意がその推進力になっているものが多いことを考えると、善意を生かすシステムづくりに配慮する必要性を改めて思った。

これからも、安心して暮らせる社会をつくるため一層の努力を続けたい。